

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00804

研究課題名(和文) 教育的ダイナモとしての「利他」精神の言語哲学的考察とその還元：大学英語教育を例に

研究課題名(英文) A Philosophical Consideration of the "Altruistic" Attitude as a Pedagogical Dynamo and Its Reduction: The Case of University English Education

研究代表者

山中 司 (YAMANAKA, Tsukasa)

立命館大学・生命科学部・教授

研究者番号：30524467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の学校教育における一般的な学習のあり方を3つの段階に分け、「利他的な学び」こそが「うまくいく(機能する)」教育の実現に近いことを理論、実践の双方から実証を試みた研究であった。「利他的な学び」を他者の視点に第一義的に立って貢献を模索して創造的に実行する活動であると定義し、利他的な学びを学習に組み込むことが、Rortyらのネオ・プラグマティズムに基づく理論的示唆からも、学習者に「学びの実感」を与え、学習効果を高める上で頗る効果的な可能性があるとの認識に立ち研究を行った。最終的には、利他を感謝に置き換えた「感謝研究」として実証的な研究へとつなげることができ、成果を上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、新たに学習における利他を創出したり、開発したりすることを企図した研究ではない。本研究は教育における利他を「発掘」し、新たな研究と実践の切り口を見出すことで、機能的な教育の幅広い実践に貢献できることを目指したものであった。この意味で利他を可視化、軽量化できる感謝に意味論を移し、それに伴う感謝日記という具体的な教育活動におけるメソッドロジーへの示唆につなげることができたことは有意義であった。

研究成果の概要(英文)： This study attempted to demonstrate, from both theoretical and practical perspectives, that "altruistic learning" is the closest to realizing "successful (functioning)" education by dividing general learning in Japanese school education into three stages. Defining "altruistic learning" as a creative activity that seeks to contribute to others' perspectives first and foremost, the theoretical suggestion based on Rorty's neo-pragmatism suggests that incorporating altruistic learning into learning may be extremely effective in giving learners a "sense of learning" and enhancing learning effectiveness. In the end, we were able to conduct empirical research as "Gratitude Research," in which "altruism" was replaced by "gratitude," and we were able to achieve results.

研究分野：言語哲学、応用言語学、コミュニケーション論

キーワード：利他 感謝研究 英語教育 感謝日記 プラグマティズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、先述した申請者らの過去の実践にある。それはオンライン上でコミュニケーションができる Space を用意し、英語の入学前課題を特定の高校生にさせたものであったが、条件として「自分以外に提出される他人の課題の複数に対し、必ず毎回コメントする」ことのみを課し、後は学習者に英語で自由なコミュニケーションをさせた。申請者は一切の英語に関する指導は入れず、コメントもフィードバックも意図的にしなかった。結果はどうであったか。学習者は、直接顔を見たこともない同じ高校生に対して、互いに驚くほど積極的なコミュニケーションのやり取りを行い、事後の調査では、およそ半数の者が、このサイトの活動を通して「自分の英語力が向上した」と答えたのである。

英語教員が学習者のために思い、回収した答案を真っ赤になるまで直し返却したものの、そのフィードバックがほとんど活かされない苦い経験をする者は多い。大学英語教育におけるモチベーションの問題は大変深刻なものがあリ、学習者が「学んだ」という実感を持たせることにも、実際の能力を向上させることにも、失敗し徒労に終わる実践は枚挙に暇がない。そしてこれは大学英語教育のみに限らないはずである。「学ぶ」とは何なのか、教員とはどうあるべきなのか。「全く教えなかった」課題で、半数近い学習者が「学んだ」と回答したことは、申請者らを大いに驚かせ、学びについて深く考えさせるきっかけを与えたのである。

協働学習、反転学習、アクティブ・ラーニングなど、「学び」の研究は常に進捗し、効率的な学習という点においては、その進歩たるや凄まじいものがある。しかし、学習者が本当の意味で、「底なし青天井に学ぶ」ことをさせるためにはどうしたら良いのか、そしてどういった契機が彼らに「学んだ」実感を伴わせるのか、未だ十分に解明されているとは言えないと思われる。また教育者が、いかなる学びの「パラダイム」を追求すべきなのか、その根本の理解を曖昧なままにして、日々の実践に奔走させられている現状を問題視すべきである。

そこで本研究があえて着目したのが、他人のために尽くすことを第一義的に据えた学びの可能性である。学習には本来、自分のためにするものという大前提があり、学習がもたらす成果は、当事者である自分にこそまずは還元されるべきもの、という暗黙裡のルールがあるように思われる。本研究はこの前提を疑いたい。他人の学びに専ら尽くすことを学びの主目的とするのである。利他の経営で、ビジネスの分野ではその成果が注目されているが、教育の分野において、他人の学びをサポートすることはあっても、他人の学びに全面的にコミットする学びの姿が追求されることはこれまでほとんどなかったと言ってよいだろう。申請者も含め、英語教員の実体験として、英語関連のテスト対策として最も効果のある手法は、学習者が何度も過去問題を解いて対策を行うよりも、その学習者をテスト対策の講師とし、その学習者に教えさせることで、他の学習者の点数を上げるよう取り組ませることが、結果的に講師役の学習者の点数も伸ばすことであることを経験的に知っている。しかし、こうした実践知は必ずしも実証されてはならず、事実一般化は難しいであろう。しかし、利他的学習に取り組むことで、これまでの学びには起こりえなかった潜在的可能性を掘り起こすことができるかもしれないのである。もちろんその副作用やデメリットにも注視すべきではある。

理論的に斟酌すると、他人の学びに尽くすとは、自分のための学習と比較して「馴染みのない」領域で活躍することが求められることを意味し、学習者に一層の認知的負荷を要求する。また「人の役に立ちたい/人から良く思われたい」という自尊感情を自然な形で導き出すことにも繋がり、結果的に学びに対する相応のコミットメントが引き出せる可能性がある。また利他的に行動することは、相手が持つ「主導権」を尊重した会話を引き出し、Rorty の指摘するように、会話を「終局させる」のではなく、むしろ「継続させる」ことに重きを置いた平面的なコミュニケーションを意図的に起こすことができる。このように、利他的な学びはこれまでにない新たな学習の理論的な拡張可能性を孕んでおり、実証研究と並行して行うことで、理論、実践共に強化がなされ、多くの関連研究を誘発できると思われるのである。

2. 研究の目的

本研究は、日本の学校教育における一般的な学習のあり方を 3 つの段階に分け、「利他的な学び」こそが「うまくいく(機能する)」教育の実現に近いことを理論、実践の双方から実証を試みる。仮定する学習のあり方の 3 段階とは、(1)セルフ・スタディ、(2)「教え合い」学習、(3)「利他的」学習である。この着想は Richard Rorty のプラグマティズムを基軸としており、「利己的な愛」を(1)の段階、「隣人愛」を(2)の段階、「自己犠牲的な愛」を(3)の段階と措定し、教育論として独自に敷衍したものである。また(1)と(2)は既に一般の教育システムで多く取り入れられている手法である。(1)は自己のための学習で、その限界は言うまでもなく自らの能力が及ぶ範囲でしか「学び」が起こらない。(2)はいわば知識の「理解者」が「未理解者」に教授を行う手法であり、一見効果的には見えるが、実体は学習者が、固定された特定の知識の強化を、教員に代わ

って「やらされている」だけであり、あえて批判的に見れば教授の効率化に貢献しているに過ぎないとも言える。(3)は他人を利するため、他者の視点に第一義的に立って貢献を模索して創造的に実行する活動であると定義し、所謂「協働学習」とは区別する。利他的な学びを学習に組み込むことは、申請者らによる過去の試行実践や、Rortyらのネオ・プラグマティズムに基づく理論的示唆からも、学習者に「学びの実感」を与え、学習効果を高める上で頗る効果的な可能性がある。

本研究は<理論研究>と<実装>の2つのモジュールで構成される。<理論研究>では、これまで言語哲学等で議論されてきたプラグマティズムを理論的支柱とし、D. Davidson や Rorty らが論じてきた言語コミュニケーションに対する考察を、他人のために尽くし捧げる「利他」の視点から新たに読み解く。ハンプティダンブティに象徴される、言語の独我論がまかり通るはずの言語コミュニケーションにおいて、なぜ私たちは「分かり合える」のか、その理由の一端が「利他」精神に見出せると考えており、理論上新規の貢献ができるものと考えている。

<実装>では、利他精神の英語教育分野への応用として、PBL(Project-based Learning)型の英語教育のためのオンライン・コミュニケーション・サイト(Hassin Platform)の開発と運用を行う。本サイトに関しては、既に立命館大学生命科学部・薬学部へ2016年度入学の高校3年生約100名を対象に、オンライン上でコミュニケーションが可能なサイトを構築・運用しており、また石田早苗非常勤講師が担当する千葉商科大学英語クラスとの共同プロジェクトとしてHassin Platformの大学版を構築し、対象学生全てのやり取りと質問紙調査のデータを保持している(<https://serene-reaches-8600.herokuapp.com/users> ほか、パスワード制限有)。これらのプロトタイプ的实践をもとに、オンライン空間での創発と協働を、利他活動として大々的に展開する教育サイトを運営・構築し、成果を幅広く共有することを目指す。具体的には、参加団体、利用目的、対象者を他大学、そして大学以外の教育分野へ拡張させ、最も利他的精神が発揮されやすいセキュリティレベル、公開の度合い、フィードバックの方略や頻度について、実証データを得ながら調整を行い、汎用化に耐えうるオンライン・プラットフォームを完成させる。なお研究期間終了後は、広く一般の教育分野で使えるものとして公開、解放する。

利他とは、稲盛和夫氏が掲げる経営哲学に於いて注目され、これまで議論されることの多かった論点である。利他精神の経営学における議論が、当該分野に有効な理論装置として機能するならば、他分野への波及は試みられて然るべきである。批判的に言われるところの教育が持つ閉鎖性を打破するためにも、「利他の精神」と英語教育との関連について具体的に明らかにし、敷衍として教育の分野における「利他的振る舞い」の意義を実証する。そして日本起点の教育哲学として、「利他的思想」一般化を試みたいと考えるのである。

今や教育の世界では、「教える者」から「学ぶ者」への一方向的な教授法は影を潜め、現実の問題をもとに、共に学び、実践知を高め合いながら、総合的な「知」を形成することが求められるようになってきた。本研究代表者が専門とする大学英語教育の分野でもその傾向は変わらず、機能的な英語教育の実現、「使える英語」を身につけられる実践が強く要請されている。

英語教育を含む教育のあらゆる諸活動が、社会との接点を持つことで、学生・生徒はオーセンティックな学習への動機付けを得やすくなり、またプラグマティズムを教育が依拠すべき理論的基盤とするべきかについては諸説あると思われるが、Deweyがプラグマティズムの哲学を「教育の理論」として位置づけていることをはじめ、例えば昨今の学習指導要領に見られる「生きる力」という表現を見ても、教育がプラグマティックであることを全面的に否定することは難しい。この意味では教育実践がreal lifeなものであればある程良いのであるが、しかし教育とは、あくまで社会への「踊り場」的位置付けで失敗が許されるべきであり、「sink or swim(泳げるか、溺れるか)」であるべきではない。セーフティーネットが確保され、学習者は安心して挑戦できる一方、何度でも挑戦できる環境こそ教育が実現すべき「Space」とであると考えられる。

昨今のオンライン空間では、様々な交流、発信、ネットワーキングのSpaceは生まれている一方、上記の教育配慮を十分施した英語教育関連のコミュニケーション・サイトは未だ少ないと思われる。未熟な学習者であっても果敢にプロジェクト活動を行い、発信やコミュニケーションに挑戦できるサイトをオンライン上に立ち上げ、実践活動を展開することで、それらがいかにか新たな「学び」の可能性を担保するか、そしてそこに働く利他の精神が、その学びをいかに促進するダイナモになりうるかを明らかにすることは、英語教育を超えた、教育一般における「利他精神」の発掘に他ならず、その言語哲学的解釈は、新たなコミュニケーション論への貢献となりうるものと思われる。

3. 研究の方法

<理論研究>では、主として言語哲学(プラグマティズム)を依拠とした、「利他」の教育における概念構築を目的とする。すなわち、教育一般において利他の考えが如何なる意味で有用で、コミュニケーション論的に新しいものであるのか、新規の分野における理論構築として、可能な限りこの地平について詳らかにすることを目指す。なお本研究が追求する利他とは、これまで経済学の一部で議論されてきた「互酬性(reciprocity)」の議論とは一線を画す。本研究は、対価や見返りを求める「取引」の枠組みで利他を考えておらず、専ら他人のために与え続ける思想こそが利他であると考えられる。これは従来、自己犠牲、滅私奉公などと批判的に語られる傾向のあつ

た伝統的な日本的価値観に近いものである。利他の思想とは、日本が、経営哲学の分野のみならず、教育哲学としても「発掘」し、世界に向けてグローバルに発進し得る概念であり、その理論的環境の萌芽を、本研究が整備したいと考えるのである。

理論研究 1 年目は、プラグマティズムと利他の言語哲学的関係について論考を行う。W. James らの定義を待つまでもなく、プラグマティズムはその有用性に主眼が置かれるが、いわば(自分ではなく)他に中心のある利他の考えが、有用であるのかどうかについて、W.V.O. Quine, D. Davidson, Rorty らの論考を辿りながら探求する。Davidson の passing theory, principle of charity、それを受けた Rorty のネオ・プラグマティズムを利他の視点から新たに読み解き、コミュニケーション論としての新規の貢献を目指した。

理論研究 2 年目は、本研究が依拠するプラグマティズムと利他の抜本的な考察、すなわち、プラグマティックであることがなぜ良いのか、そしてそれが利他と接点を持つことがなぜ有用なのかについて言語哲学的考察を行う。これは、なぜ私たちは「分かり合う」ことができるのか、言い間違いをしたり、多義的な解釈を許容する言語表現を日常的に用いたりしても、なぜ多くの場合コミュニケーションとして成立するのか(言語の独我論を実践するハンブレイク・インテンションにならないのか)、について根本的な議論を展開する。なお本論考においては、昨今の IoT に代表されるメディア環境の変容もたらず、言語以外のコミュニケーションへのアクセシビリティの飛躍的向上を背景とし、21 世紀型の言語コミュニケーション論として、それが対象とする裾野を野心的に拡げることを目指した。

理論研究 3 年目は、利他の教育学的有用性を論じるため、社会言語学 / 語用論的知見から、教室に存在する言説の権力関係(教員-学習者)を整理し、「同志」としての学習者の連帯意識を使用言語の観点から明らかにする。また<実装>における取り組みでの情報と統合することで、利他的活動が、コミュニケーションをいかなる意味で促進し、学びのダイナモとなり得るのか、量的データを読み解く形で解釈を試みる。また質的なデータ分析として、学習者へのインタビューや質問紙調査を実施し、他人の学びに貢献した経験から得られたものを蒐集し、理論的結論との整合性について検証を行った。

<実装> 入学前英語教育における感謝日記の効果： 利他を感謝の尺度で量化・実証の取り組み

本研究では、立命館大学生命科学部に推薦で合格した高校生に対し 9 週間、「感謝日記」を書くグループと「良かったこと日記」を書かせるグループを作成し、各種心理指標を毎週計測した世界で一番長い「感謝日記」実験である。種々分析をした結果、「感謝日記」はパフォーマンス、とりわけモチベーションに 影響を与える結果が実証された。本成果については論文として発表するべく現在鋭意作成しているところである。

以下実験内容の概略である。「感謝日記」を書くグループと「良かったこと日記」グループにはそれぞれ 17 名が参加し、ランダムにグループ分けをした。性格検査(NEO-FFI)の結果は性格の 5 項目ともに、グループによる差はない。感謝特性 の計測を GQ-6 で行ったが、週による差も、グループによる差もなかった。感謝特性は、「感謝日記」を書くことというように変化することではなく、性格のようなものである可能性が推定できる。幸福度(SWLS による計測)結果は、週が進むにつれ、どちらのグループも幸福度が向上することを示した。また、Mood 変化(POMS)も、週が進むに連れ、どちらのグループも Mood のネガティブさが減少し、Mood がポジティブになっていった。大学合格が決まり、春休みということもあり、こうした結果となった可能性がある。なお唯一、日記の内容による差がでたのは、モチベーションであった。「良かったこと日記」のグループは、週を追うごとに「なぜ大学にいくのですか」というモチベーションのスコアが有意に下がった。一方で「感謝日記」をつけたグループは、このモチベーションに変化がなく、9 週間の春休みでもモチベーションは維持されるという結果になった。

本研究は、利他的な学びの意義に理論、実践の双方から着目するものであるが、言うまでもなく、本研究が新たに学習における利他を創出したり、開発したりするものではない。通常の学びや、「教え合い」学習の中にも利他は様々な形で実践されてきたはずであり、この意味でも本研究は教育における利他を「発掘」し、新たな研究と実践の切り口を見出すことで、機能的な教育の幅広い実践に貢献できることを目指すものである(「利他」と別カテゴリーで述べることなく、「教え合い」学習の拡張的再定義でも構わない)。従って本研究は、理論、実装の双方において、既存の枠組みやサービスでなされてきた成果は最大限活用する。理論であれば、互恵性や信頼に関する経済学の枠組み、インターネットにおける「クラウド」の思想、認知科学や心理学で議論されている「共感覚」の研究等、これらがコミュニケーション論的に持ちうる含意は可能な範囲で踏襲する。全体を通して、教育全体の活性化に寄与できる研究を目指した。

4. 研究成果

本研究による関連する成果は以下に示す著作、論文等に示してきた。一部を抜粋することで成果の記載とする。

<著書>

- 2021/03 『SDGs 表現論：プロジェクト・プラグマティズム・ジブンゴト』 (共著)
2021/02 『プロジェクト発信型英語プログラム：自分軸を鍛える「教えない」教育』 (共著)
2019/11 『理系 国際学会のためのビギナーズガイド』 (共著)
2019/05 『自分を肯定して生きる：プラグマティックな生き方入門』 (単著)

<論文>

- 2021/03 概説: Cook (2015) "Birds our of Dinosaurs - The Death and Life of Applied Linguistics-" 立命館大学 理工学研究所紀要 79,13-21 頁 (単著)
2021/02 「総合的な探究の時間」における教師の指導・助言のあり方—教師と生徒の認識を探る調査結果から— 立命館教職教育研究 8,21-30 頁 (共著)
2020/09 大学における超短期留学プログラムの取り組み—立命館大学全学留学プログラム Global Fieldwork Project の分析からみえた教育的意義— グローバル人材育成教育研究 8 (1),46-57 頁 (共著)
2020/03 「グローバリゼーションと言語—未だ"English as Foreign Language(外国語としての英語)"環境である日本の現状から—」 『立命館大学理工学研究所紀要』 78,13-17 (単著)
2020/03 「英語教育関係者は AI による淘汰に「座して死を待つ」ことしかしないのか?—未来を先取りした自己変革が求められる「彼ら」に対する警鐘の哲学—」 『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』 16,49-57 (単著)
2020/03 「教職協働による「生命科学部 独自留学プログラム」の参加者の増加に向けた取り組み」 『立命館高等研究』 20,163-178 (共著)
2020/02 「留学・グローバル政策を考える際の 10 の論点 - 「評価」という視座を中心に - 」 ウェブマガジン 『留学交流』 2020 年 2 月号, 107,1-9 (単著)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 辰野 有、山中 司	4. 巻 20
2. 論文標題 教職協働による「生命科学部 独自留学プログラム」の参加者の増加に向けた取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館高等研究	6. 最初と最後の頁 163-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山中 司	4. 巻 78
2. 論文標題 グローバリゼーションと言語：未だ"English as Foreign Language(外国語としての英語)"環境である日本の現状から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館大学理工学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山中 司	4. 巻 16
2. 論文標題 英語教育関係者はAIによる淘汰に「座して死を待つ」ことしかしないのか?: 未来を先取りした自己変革が求められる「彼ら」に対する警鐘の哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011983	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山中 司	4. 巻 107
2. 論文標題 留学・グローバル政策を考える際の10の論点：「評価」という視座を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 留学交流(ウェブマガジン)	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山中 司	4. 巻 12-1
2. 論文標題 「ルーブリック評価に対する根本的懐疑：建設的な解決方向を模索して」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 政策情報学会誌	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中 司	4. 巻 77
2. 論文標題 「ヒューリスティック・コミュニケーション領域」の素描：コミュニケーション研究の新パラダイムの創造とバザールとしての意味付与」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 理工学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中 司	4. 巻 38
2. 論文標題 「大学にもう英語教育はいらない：自身の「否定」と「乗り越え」が求められる英語教育者へのささやかなる警鐘」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館人間科学研究	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsukasa YAMANAKA, Yukie KONDO	4. 巻 50-6(増刷)
2. 論文標題 Exploring an Adequate Placement Test with Face Validity and Learners' Sense of Reality: A Consideration of the Vulnerabilities in Existing English Assessment Models and an Attempt at a Solution	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語学論説資料	6. 最初と最後の頁 798-806
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsukasa YAMANAKA	4. 巻 50-6(増刷)
2. 論文標題 A Report on "English for Science & Technology at UC Davis": The Overseas Program of the College of Life Sciences, Pharmaceutical Sciences, and Sports and Health Science	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語学論説資料	6. 最初と最後の頁 791-797
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中 司、小田桐一弘	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 大学における超短期留学プログラムの取り組み: 立命館大学全学留学プログラムGlobal Fieldwork Projectの分析からみえた教育的意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 グローバル人材育成教育研究	6. 最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤雪絵、木村修平、山中 司、山下 美朋、井之上 浩一	4. 巻 4
2. 論文標題 学際的なチーム・ティーチングによる学生の英語発信力育成: 薬学・生命科学専門分野の教員と英語教員はどのようにコラボレーションできるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 薬学教育	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺紀子、山中 司	4. 巻 8
2. 論文標題 「総合的な探究の時間」における教師の指導・助言のあり方: 教師と生徒の認識を巡る調査結果から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館教職教育研究	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山中 司	4. 巻 79
2. 論文標題 概説: Cook (2015) "Birds our of Dinosaurs - The Death and Life of Applied Linguistics-"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 理工学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 「自分ごと」として考えよう: SDGs表現論とマイプロジェクト
3. 学会等名 館女の女性学講演会 (群馬県立館林女子高等学校) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山中 司、久保田 敬三
2. 発表標題 Session 8: 超短期留学による留学者数拡大と効果検証の取り組み
3. 学会等名 SIIEJ (Summer Institute on International Education, Japan) 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 20年後の英語教員の職探し: 今のままの英語教育ならいけない
3. 学会等名 大阪大学 マルチリンガル教育センターFD講演会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 超短期留学プログラムの意義と成果の検証: 全学留学プログラムGlobal Fieldwork Project参加学生からみえた傾向
3. 学会等名 海外留学の客観的效果測定: 国際シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 学生・若者にとってのSDGs: 現状と今後の可能性
3. 学会等名 事業構想大学院大学「SDGs新事業プロジェクト研究(第2期・大阪校)」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 SDGs時代に私の生き方を考える
3. 学会等名 xCross value夕活セミナー(一般財団法人 京都知恵産業創造の森)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 「自分ごと」として考えよう: SDGs表現論とマイプロジェクト
3. 学会等名 館女の女性学講演会(群馬県立館林女子高等学校)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山中 司
2. 発表標題 「留学サポートデスクのコンセプト」
3. 学会等名 株式会社クレオテック留学センター夏期研修（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山中 司、木村 修平、山下 美朋、近藤 雪絵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 プロジェクト発信型英語プログラム：自分軸を鍛える「教えない」教育	

1. 著者名 山中 司、上田 準也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 海竜社	5. 総ページ数 208
3. 書名 SDGs表現論：プロジェクト・プラグマティズム・ジブンゴト	

1. 著者名 山中 司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 海竜社	5. 総ページ数 192
3. 書名 自分を肯定して生きる：プラグマティックな生き方入門	

1. 著者名 山中 司、西澤幹雄、山下美朋	4. 発行年 2019年
2. 出版社 裳華房	5. 総ページ数 146
3. 書名 理系 国際学会のためのビギナーズガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------